



みすず



館長に就任して

図書館長 松田 幸子

本年4月に図書館長に就任して以来、私は学生がより一層多く図書館を利用するようにと、図書館の職員二人と共に知恵を出し合っております。その最初は玄関近くに「ふれあいギャラリー」を設け、第一回図書館主催の七夕文学賞受賞作品（俳句、短歌）を発表したことであります。その他、「四季おりおりの短大」の写真展、読書週間にちなんだ絵本の表紙のカラーコピー展などを行なってきました。これからも図書館にふさわしい新しい企画を次々に考えていきたいと思っております。

もちろん大学図書館の使命は、大学における教育や研究に必要な資料や情報を収集し、学生や先生達に提供し、学習や研究に寄与することにあります。その点に関しては、本学の図書館では職員の努力により、質の高い迅速なサービスが行なわれていると自負しております。しかしそのようなサービス能力も、利用者が多くあってこそ、より一層生きてくるといえるものです。したがって多くの学生が図書館を利用することを期待しております。

教室で受け身の講義を聞くだけでは、人間形成の全てを学ぶことは出来ません。みずからの人間形成をめざす学生にとっては、大学の図書館は非常に重要なものであります。図書館に通うことによって、学生生活は一層充実するでありましょう。私もその手助けが出来るように最善の努力をするつもりであります。よろしく願いいたします。

目次

館長に就任して	図書館長 松田 幸子 …………… 1
「共感するということ」	講 師 山口 光治 …………… 2
私の中の本の位置	国文科2年 田中絵美子 …………… 4
「再び本を読む」	幼児教育科2年 吉澤邦美子 …………… 5
児童文化研究大会に参加して	幼児教育科1年 大岩 咲子 …………… 6
図書館ガイド	…………… 7
図書館ニュース	…………… 8

「共感するところ」



講師 山口 光治

前々から読もうと思っていた佐江衆一の『黄落』（新潮文庫）をようやく読み終えた。刊行されたのは平成7年ではあるが、文庫本が発行されたら読もうと思いつきながら昨年かから積み上げられたままとなっていた。この本は、ドウ・マゴ文学賞という賞を受賞し文学的な評価もさることながら、在宅介護に関心をもつ者に多くの課題を投げかけてくれる。ストーリーは主人公夫婦が両親の介護問題に出会い、入院や転院、在宅サービスや施設サービスの利用、兄弟間や夫婦間の葛藤、痴呆症による言動などさまざまな出来事を通じて苦悩しながら生きていく姿を描いている。

同じ在宅介護について書かれた本としては、有吉佐和子の『恍惚の人』（新潮社文庫）がよく引き合いに出されるが、それが刊行されたのが昭和47年であり、『黄落』とは23年間の開きがある。この間にわが国の高齢化率は7%から14%に急上昇し、社会状況の変化は福祉予算の増大やそれに伴う社会資源の拡充に著しく大きな影響を与えてきた。この二つの本を読んで比較してみると、社会の変化はもちろんのこと、家族介護への考え方、介護を支える社会的な仕組みなどその変化をいたるところで感じとることができる。ぜひ一読願いたい。

しかしながら福祉や介護制度の変革はめざましく、『黄落』が書かれてから現在までたった5年しか経過していないが、介護保険制度がスタートするなど大きく異なった制度体系となっている。介護保険下における在宅介護について書かれた文学作品が登場するのもそう遠くはないと期待している。

さて、『黄落』の話に戻るが、この本を読んでまず私が感じたのは、主人公夫婦が介護の中で出会うさまざまな問題について「よくわかる」という気持ちになったことである。つまり、共感してしまうのである。夫婦間の葛藤や兄弟間の諍い、介護の辛さや苦勞などなど「わかる」

のである。

なぜ「わかる」という気持ちになったのか。それは、私のこれまでの体験によるものが大きい。今まで何百人という高齢者とその家族に出会い、時をともにし、別れてきた。意欲的に生きる高齢者がいれば、子どもに財産を奪われ虐待される高齢者もいた。高齢者の生き方と家族模様はさまざまである。そして、出会った多くの人々から学んだことは数え切れない。だから『黄落』を読んで主人公の気持ちに共感したのも、今までの出会い体験から学びとったことが根底にあったからであろう。両親や祖父母への介護経験もないこの若僧でも・・・である。

では、共感するとはどういうことであろうか。

手元にある広辞苑（第四版）によると、共感とは「他人の体験する感情や心的状態、或いは人の主張などを、自分も全く同じように感じたり理解したりすること」と表されている。また、社会福祉実践基本用語辞典（改訂版）では、「相手の立場に身をおいて、相手が考えていること、感じていることを自分自身の中に取り入れ、相手の内的世界に似た世界を自分の中に作り出していくことをいう。同情や同調とは異なり相手の内的世界を思いやり、同様な感情状態を体験しながら、つねに判断の自由を保持していくことが大切である」と述べられている。このような共感を可能にするためには、相手の立場や感情に対してこちらから近づいていくことが必要となろう。それは自分と相手とが上下の関係性であったり、従属的な関係であるなかでは成り立たないことである。特に対人援助の専門職、例えば医師や看護婦（士）などの医療職、保育士や社会福祉士などの福祉職、教師などの教育職にいえることである。

保育士を例にとってみると、子どもの気持ちにどれだけ近づけるか、親の気持ちにどう近づいていけるのかなどが問われてくる。確かに、私たちはかつて子ども時代を経験してきた。そ

して、それによって子どもの気持ちを実体験に置き換えて「わかる」と思ってしまうかもしれない。しかし、みんなが同じような家庭環境のなかで成長してきたわけではないし、時代背景も異なるのである。そのような一人ひとりの子どもと信頼関係を築き、共感的に理解していくことはなかなか難しいことである。ましてや親となった経験のない者にとって、どれだけ親の気持ちが理解できるかは、なお難しいことかもしれない。しかし、相手が子どもであろうと親であろうと、その立場に自分自身をおいてみることによってその気持ちに近づくことは可能ではないだろうか。例え同じ経験はできないにしても、近づこうとする努力や姿勢が相手に伝わることによって信頼関係が築かれる場合も多い。まんざら若いからとか経験がないから理解できないということは言えないのである。

私が敬愛する横須賀基督教社会館の阿部志郎先生が、福祉は「自分の中に他人を存在させる内的意識的努力のプロセスに生まれる」と語っていたことを思い出す。

保育士をめざす学生に期待したいのは、援助者としての基本的態度を身につけ、共感的理解のできる保育士となって欲しいことである。特に子育てに不安を感じたり、子どもを虐待してしまうなどの問題が時折見受けられる今日だからこそである。

『黄落』の話題から少し広がりすぎた感があるが、この本を通して対人援助における共感の大切さを確認するとともに、介護者や家族の想いを改めて感じ取ることができたような気がする。そして、自分が経験したことがなく相手の気持ちをどう理解し、共感していったらよいか困ったときは、このような「本」を活用してみるのも一つの方法ではないかと思えるのである。

私の中の本の位置

国文科2年 田中絵美子

最近、わたしと本には距離ができるようになりました。それは、別に遠い近いの距離ではなく、本と出会う回数が減ったということです。小さいころわたしは本当に本を読むことに夢中でした。一日の自由な時間のほとんどが読書で、母がわたしに言う口癖は、「もっと明るいところで読みなさい」で、わたしの将来の視力を心配したものでした。

ところが、いつからかわたしは、本以外のことに時間を費やすことが多くなってきています。本を読むよりも、テレビを観たり、友達にメールをしたり、バイトにいったり……。以前は、読書はわたしの日常にあって当たり前のことだったのに、今では本が身近にないことが当たり前になっています。もちろん、それは別のことに時間を振り向けているわけで、一概に悪いこととは言いきれませんが、

ただ、日常の中に、本と向き合う時間もあった方がいいのではないかとは思っています。

どこかでこんな言葉を目にしました。“本から学ぶものはとても多く、それは経験を超える時すらある”。本当にそのとおりだと思います。何事においても経験豊富な人はいないし、すべてが自分の計画どおりにうまくいくことなんてありません。突然、今まで体験もせず、予想もしていなかった事が起きたら、そこでは自分の中の知識を活用して対処するしかありません。

その知識の源はなにかといえれば、わたしはまず本であろうと思います。テレビやラジオなどでも情報を得ることは可能ですが、こちらの都合に合わせて放送されるわけではありませんし、その点本はいつでも、そして何度でもわたし達を待っていてくれます。その分わたし達は自由であり、個々のペースにあわせ

て進むことができます。

そして何よりも大切なのが、本の中には昔の知識や情報がたくさん存在するという事です。これによって、先程の言葉が生まれてきたのでしょうか。わたし達はページをめくれば、いつの時代にもタイムスリップでき、どんな人物にも出会うことができます。そして、その出会いにより、驚き、喜び、悲しみ、共感などを受け何か一つでも得るものがあります。もっとも、得たものをどう蓄え活用するか、それはまた難しいのですけれど。

本を読むことが当たり前だった頃には、このことに気付かず、ただ読むということに夢中でした。これからは、新しくやらなければいけないことがもっと増え、本を読む時間がより減ってしまう気がします。けれど、わたしなりに、一つ一つの本との出会いを大切にしていきたいと思っています。

本学の先生方の新刊書

(平成12年中に刊行された単独著書・分拍執筆)

(著者五十首順)

* 天田邦子先生著書

『信州子ども20世紀』

(信濃毎日新聞社 七〇〇〇円/分拍執筆)

* 『女子学生の職業意識』

(勤草書房 五〇〇〇円/分拍執筆)

* 大橋敦夫・西山秀人先生著書

『3日でわかる古典文学』

(ダイヤモンド社) / 共同監修

* 田中岳文先生著書

『コリアンドリーム・韓国電子メディア探訪』別冊「本とコンピュータ」

(大日本印刷) 二〇〇〇円/分拍執筆

* 林昭志先生著書

『子どもの発達と学校』

(ナカニシヤ出版) 二〇〇〇円/分拍執筆

* 菱田隆昭先生著書

『教育学概論』(高陵社) 一〇〇〇円/共著

* 『新・保育内容方法論』

(みらい社) 二〇〇〇円/分拍執筆

* 『柏市史近代編』(柏市教育委員会) / 分拍執筆

* 『教育沿革史料の翻刻』

— 明治十六年宮城県下私塾寺子屋調査書 —

(和洋女子大学岡山研究室) / 共著

* 山口光治先生著書

『長野県版介護保険がまるごとわかる本』

一〇〇〇円(信濃毎日新聞社) 二〇〇〇円/分拍執筆

* 山本秀麿先生著書

『志賀高原・画文集』

(北信ローカル社) 一〇〇〇円/単独著書

本学園文科一年生の安井美貴さん(ペンネームたまきさん)が高校時代に書き留めた八十八編の読書メモ(A Lot of Memories)を単行本として出版されました。

「再び本を読む」

幼児教育科2年 吉澤邦美子

実のところ、私はこの短大に入学してから現在まで約1年半、図書館で本を借りたことが一度もない。これには、自分でもかなり驚いている。もちろん、レポートの資料を探したり、卒業研究のための参考文献を閲覧する等して、図書館を利用しているものの、私の学生証のバーコードを読み取った時といえ、レーザーディスクを観た時だけなのだ。

近頃、全くといっていい程、本を読んでいない。一冊丸々夢中になって読んだという最後の記憶は、2年前かもしれない。しかも、「最近読んだ本は何ですか」という、受験での面接試験の対応のためだった気がする。なんとも情けない話である。もともと私は、本を読むのが好きな子どもだったと思う。いつからか、こんなにも本を読まなくなったのだろうか。

小学生の時、私は町の音楽堂でピアノを習っていた。その練習が終わった後は、決まって姉たちと町立図書館へ行き、本を2冊ずつ借りた。次のピアノの練習日までに読み終え、また2冊借りる。これを四、五年繰り返した。私は特におとぎ話が好きで、中でも『シンデレラ』が

大のお気に入りだった。

中学生の頃は、ミステリーやサスペンスものに、どっぷりとはまった。学校の図書館にあった、シリーズ化されたミステリー一本を、勉強そっちのけで夢中になって読んだ。犯人は誰なのか、どうやって推理するのか、いつも胸を躍らせながら。そして、生活ノートの日記の欄に、サスペンスがどんなにおもしろいかを、担任の先生に熱く語っていた。今考えれば、一体何をしていたのやら……。

高校生になってからは、もうほとんど本を読んでいない。雑誌や漫画を手にするのががぜん多くなったせいもあろう。小学校低学年の頃だろうか、初めて漫画本を手にし、その読み進め方がわからなかった。姉に教わりスラスラと読めるようになったその日から、漫画本、そして雑誌等は確かに娯楽の一つとなっている。

世間では常日ごろ、話題の本というのがあげられている。それらの本は、テレビのワイドショー等でも取り上げられ紹介される。そして、本屋に行くと、一番目立つコーナーに積まれ、私たちの目を引く。そういったものを見ると、やはり読んでみ

たいという衝動に駆られる。しかし私の場合、ここまでで終わってしまう。本に掛けるお金や時間を別のものに回してしまうことが多いのだ。だが、こんな私にも今、これまでになく読みたいと思っている本がある。それは『ハリーポッター』のシリーズだ。いかにも世間に影響を受けたという感じだが、世界中で読み愛されているこの本は、児童文学でありながら大人でも十分楽しめるという。また、この先一年ごとに主人公も一歳ずつ年を重ね、まだあと何年か続くらしいこの本を、是非とも読んでみたいのだ。

今回この文を書くにあたり、子どもの頃の自分と本との関わり方を思い出した。そんな子ども時代の心に戻って『ハリーポッター』を読んでみようかと思う。本のおもしろさを再確認し、憧れやワクワクする気持ちを、本を読むことによって存分に味わいたいと思う。



児童文化研究大会 に参加して

幼児教育科1年 大岩 咲子

10月14日に行われた児童文化研究大会の講演会は輪島直幸氏の「笑顔は～」だったが、私達の年でこんなに話に引き込まれてしまうケースはめずらしいと思う。輪島さんは話の流し方が上手だと思った。そして彼が、NHKや教育テレビで体操の指導をしていることにまず驚いて、興味をもった。

私達は幼児教育科の学生であり、将来子ども達を指導する立場に立つことを前提として話を聞いたわけだが、目の前に人を座らせ、あれだけの人数を笑わせたり、納得のいく結末につなげたりすることは自分達にはまだまだ難しいと感じた。経験も豊富なのだろう。私がもしこの先あのようなステージの上でおなじような内容を話しても、きっと客の興味を向けることはできないと思った。

私があの日学んだ指導遊びの中で最も共感を覚えたのは、大黒柱の話だった。私が結婚し、夫となる人と幸せな家庭を築き、子どもを育て、胸を張ってその子が私達の「実家」を離れ

ていけるようにするためには、夫を大黒柱とし、家族みんなが協力していくことが大切だという事だった。その家族の中であっても、やはり欠かせないものはコミュニケーションであると知った。ただ毎日朝起きて帰りを待ちいろんな準備をして寝るという生活なのではなく、その日にあった出来事を笑って話ができる家庭が暖かいと思う。もちろん話をする側にとって、相手が優しい顔で聞いてくれると、落ち着いて話ができるしもっと話もしたくなる。逆の立場でも、話し方に明るさを持った人のことは、もっと聞きたくなるものだ。輪島さんは明るい笑顔の持ち主である。

会場が一つになり、彼の話を笑顔で聞けるのも、彼の講演会で、笑顔で私達とコミュニケーションをとってくれたからだと思う。私も笑顔から始めて、親しくつき合える仲間を作っていきたいと思った。

午後の分科会では、歌を通じての諏訪ひろみさんの話を聞いた。遠くからステージを見てい

た限り、とても視力が悪いとは思えない程、明るい声、明るい表情で様々な出来事を話して下さった諏訪さん。微妙な差で、私達健常者からは障害者としての偏見や、障害を持って生活している方々からは「その程度じゃ十分健常者だろう」という目で見られてしまった過去だってきっとあると思う。そんな中であの日一番最初、彼女ははっきりと「私は障害者なんです」と言い切った。私は諏訪さんの勇氣に感動した。長野パラリンピックでステージを務めさせてもらったと話していた彼女の歌は、堂々として力強く、夢は誰でもつかめるチャンスがあるんだと思った。きっと私はいつの間にかそのチャンスを毎日の何気ない生活の中で見逃しているかもしれないと思った。今一度自分を見直して、充実した日々が送れるよう、あの日教わった笑顔と何かをなしとげようとする意欲を忘れずに、夢に向かって生きていきたいと思った。



*** 本学以外の図書館で図書資料を探してみよう ***

本学の図書館は現在約50,000冊の蔵書を所蔵していますが、学術研究・学習活動に十分な蔵書数とはいえません。

当然他の図書館・機関からの借り受けや、文献複写サービスで補わなければなりません。

最近、国内外の様々な図書館・研究機関等がインターネットで蔵書公開しています。それらを効果的に使いこなすことで、研究活動も大いに成果が上がると思いますので、今回はこれらの紹介をしてみましょう。

インターネットで検索出来る書誌情報の検索 (OPAC公開している図書館数)

設置形態別	数	公開図書館名 (代表的なもの)
国立図書館・機関	5	国立国会図書館・国立民族学博物館・国文学研究資料館等
公立図書館	32	浦安市立図書館・神奈川近代文学館等
大学・短大図書館	156	慶応義塾大学・信州大学等
高等専門学校図書館	2	石川高専等
民間図書館・研究所図書館	5	統計数理研究所・土木図書館等
合計	200	(2000.10.23現在)

さて、これら上記の図書館へはYahoo!などの検索エンジンで名称を入力し、リンクすればよいわけですが、個々の図書館へ別々にリンクしなくても、一覧からリンクしたり、一度に横断で検索できる便利なページがあります。

- ① Jump to library (In Japan) <http://ss.cc.affrc.go.jp/ric/opac/opac.html>
(日本の図書館と目録サービスへジャンプ) または <http://ss.cc.affrc.go.jp/ric/opac/opaclist.html>
- ② 日本図書館協会図書館リンク集 <http://www.soc.nacsis.ac.jp/jla/link/html>
- ③ 国立情報学研究所総合目録
データベースWWW検索サービス <http://webcat.nacsis.dc.jp/webcat.html>
- ④ 国立国会図書館 Web-Opec <http://www.ndl.go.jp/>

長野県内の公共図書館蔵書公開リスト

前述のOPAC公開図書館は普段ちょっと行って利用するというのには不便です。身近なところの図書館で本が探せて利用できたら大変便利です。長野県内でもOPAC公開しているところが有ります。

- ① 上田地域広域図書館ネットワーク (通称: エコール) <http://www.echol.go.jp/>
(上田市立図・坂城町立図・青木村立図・真田町立図・東部町立図・丸子町立金子図・上田創造館分室の約50万冊)
- ② 諏訪広域総合目録 <http://www.libnet-suwa.gr.jp/>
(岡谷図・下諏訪図・茅野市図・諏訪市図・川岸公民館図・富士見町図・風樹文庫の全蔵書)
- ③ 塩尻市立図書館 <http://www.city.shioiri.nagano.jp/>
- ④ 伊那市立図書館 <http://www.lib.city.ina.nagano.jp/>

以上、蔵書公開をしている図書館も大いに利用してみましょう。但し、遠方の各図書館は直接来館して、利用者登録する場合は問題ないのですが、今住んでいる上田からは、本学の図書館を通して図書館間貸出の手続きが必要です。司書に相談して下さい。

図書館ニュース

* 図書館玄関ホールに「ふれあいギャラリー」を設けました。

図書館長松田幸子先生のご挨拶にもありますが、皆さんが入りやすい楽しい図書館にしたいと、本年玄関ホールに2枚の掲示用ボードを新設しました。ここでは、図書館が主催する催し・イベントの掲示はもちろん、皆さんからの展覧会や作品展などを掲示することになります。

掲示が空いている時、何か計画している事柄がありましたら、遠慮なく図書館に申し出て下さい。



早速、今年は夏に「七夕」を飾り、和歌・俳句等を募集しました。その中から優秀な作品に「第一回七夕文学賞」と名付けて表彰し、入選者には館長賞を差し上げました。



また、秋には事務局次長の清水哲夫氏が、日頃撮り貯めていた短大の四季の写真展を開催しました。最近では、読書週間の行事として2000年「子ども読書年」にちなんで、絵本・童話の名作の中から本学が所蔵する絵本の表紙をカラー印刷して展示しました。



このようにこのコーナーは、図書館と利用者の皆さんで活用していきたいと思っておりますので、積極的に利用して下さい。また、ご意見をお寄せ下さい

編集 後記

紅葉で美しい独鈷山が私たちの心をなごませてくれる頃となり、今年もまた「みすず」27号をお届けすることになりました。忙しいなかでご執筆下さいました皆様に心から御礼申し上げます。特に山口光治先生の介護について「共感するということ」の一文は、動きだした介護保険制度について改めて深く考えさせられるものがありました。(松田)

みすず

上田女子短期大学附属図書館報
第27号 2000.12.発行

編集 上田女子短期大学図書委員会
発行 上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
TEL: 0268-38-6019
FAX: 0268-38-6109
E-mail: lib@uedawj.ac.jp